

# 映画作品におけるいわゆる差別語の使用について

—— 勝新太郎主演『座頭市』シリーズの「めくら」を例として ——

## 三 浦 淳

### 1. はじめに

差別語と呼ばれる言葉がある。表現の自由は近代社会の礎となる大原則であるが、にもかかわらず社会の中には使うことが好ましくないとされる言葉があり、マスコミでは用語規制が行われている。

日本で言えば、放送のニュース番組における用語規制は1962年に民放連によって「放送用語集」としてまとめられていたが<sup>1)</sup>、1973年以降、主として部落解放同盟によっていわゆる差別語狩りが公然と行われるようになると、それに対応して放送局の用語規制もドラマを含めて対象語彙を大幅に増やしていった<sup>2)</sup>。

本論文では、用語規制が厳しくなった1973年以前に主として制作された勝新太郎主演によるシリーズ映画『座頭市』を例として、「めくら」という用語の使われ方について考えてみたい。この作品は座頭<sup>3)</sup>の市が、旅をする途上で様々な人物や事件と出会い、悪人を成敗するという物語である。最初からシリーズとして企画されたのではなく、1962年に封切られた『座頭市物語』がヒットしたために続編がただちに制作され、結局はシリーズ化された。差別語狩りが激化する1973年にシリーズ第25作『新座頭市物語 笠間の血祭り』が公開された後しばらく制作がなく、15年余りたった1989年に公開された『座頭市』が勝新太郎主演によるこのシリーズ映画の最終作となった。

なお、映画制作が途切れた期間中の1974年から1979年までは同じ勝新太郎主演でテレビ・ドラマとしてシリーズで放送されていた。

ここで勝新太郎主演のシリーズ映画『座頭市』を材料として選んだのは、用

語規制が厳しくなる以前の作品（1989年の最終作を除く）であること、盲目の俠客が主人公であるためいわゆる差別語が使われやすい作品であること、計26作も作られた人気映画であり当時の日本における言語感覚を考えるのに適した材料であることによっている。ちなみに60年代には「めくら」が今日のような「差別語」とは考えられていなかったという事実は、65年に『女めくら物語』（大映、島耕二監督）というタイトルの映画が作られていることから分かる。『座頭市』は全26作すべてで「めくら」が使われているが、89年の最終作では使用回数が少ないのは、言葉狩りの影響からかもしれない。

また、このシリーズは人気作であるにもかかわらずテレビで放映されないことがない。DVDでは全作品が出ており、名画座でもしばしば上映されているのに、テレビで放送されないのは、明らかに作中で頻出する「めくら」が差別語とされているからである。先に述べた1962年の民放連「放送用語集」では「めくら」も「避けたいことば」に挙げられているが、あくまで「放送用語、とくにアナウンス用語としては」であった。しかし1973年4月、北九州市のテレビ局が深夜に放送した映画『浮草』（1959年）に対して部落解放同盟北九州市八幡地区協議会が行った抗議においては、「旅役者風情と結婚なんかさせてなるものか」「人種が違うんだ、人種が、お前らと！」といった台詞が問題視され、この言葉が作品の中でどう位置づけられるか、作品全体がこの発言を支持・肯定するようになっているかとはまったく無関係に槍玉に挙げられた。文脈を無視して切り取られた言葉だけが抗議の対象とされたのである<sup>4)</sup>。この頃から、放送局の用語規制は、ドラマを含めて文脈とは無関係に「この言葉は差別語だから使わないこと」という形でなされるようになっていく。

## 2. 『座頭市物語』の場合

『座頭市』シリーズの中で「めくら」という表現がどのように使われているかを具体的に見てみよう。まず、シリーズ第1作『座頭市物語』（1962年）を取り上げる。最初の作品だからというだけではなく、ここには「めくら」という表現の典型的な使われ方が見て取れるからだ。

冒頭、座頭市はやくざの親分・飯岡（柳永二郎）を訪ねていくが、留守だったので屋敷に上がり込んで待つことにする。たまたまその場でやくざたちがさいころ賭博をやっている。座頭市は壺を振らせてくれと頼む。それに対してやくざが「てめえ、めくらでも壺を振るのか?」と尋ねながらも承諾すると、座頭市は「めくらですからね、手際の悪いところは堪忍しておくんさい」と応じる。やがて座頭市は巧みなトリックでその場にいたやくざからカネを巻き上げてしまう。すると彼らは「このめくら坊主が、いかさまだ、ふてえ野郎だ」と憤激するのに対し、座頭市は「めくらと見くびりやがって」と応じる。

以上から分かるように、冒頭では「めくら」という言葉は座頭市本人も、他の登場人物も等しく使っている。目が見えないというネガティブな意味で使われているには違いないが、要するに座頭市の身体的特性を示す表現に過ぎないと言えるだろう。

しかし、「めくら」が身体的特性を表す完全に価値中立的な言葉なのかというと、そうとも言えない。次のシーンを見よう。

やがて飯岡の親分が帰宅し、座頭市を見ると、客分としてもてなすよう子分たちに命じる。親分は座頭市に対して「目がいけねえのに一人旅じゃ、さぞ苦労したろう」といたわりの言葉を述べ、子分たちに座頭市の居合い斬りの腕前を紹介して、「目こそ見えねえが、刀のつかへ手をかけただけで相手が震え上がっちゃう」ほどすごいと讃美する。

間もなく親分の弟分が訪ねてくる。弟分は最近結婚したばかりであり、新妻を伴ってあいさつに來たのだった。親分は二人と食膳を共にしながら座頭市が來ていることを話すのだが、相手が「座頭市とは妙な名前ですね」と応じると、「めくらだよ。(…) なまじな目あきよりよっぽど腕がある」と言って座頭市の居合い斬りの腕前を絶賛する。そして二人に居合い斬りを見せようとして別の部屋にいた座頭市を呼ばせようとするが、座頭市は居合い斬りは見世物じゃないとして応じない。これを聞いた親分は「どめくらめ、勝手なことをぬかしやがって」と怒る。

以上のように、親分が使う言葉が三段階の変化を見せているところに注目す

べきだろう。第一に、親分は座頭市本人に対して、或いは本人がいる場では「めくら」という言葉を使っていない。「目がいけねえのに」「目こそ見えねえが」という言い方をしている。これらの表現は、「めくら」という言葉より明らかに丁寧に相手の立場を思いやる意味合いを含んでいる。相手のいる場所では使用を避けているわけだから、本人の前で「めくら」と言うのは失礼になるという意識があることは明らかだ。つまり冒頭で子分たちが座頭市の前で「めくら」という表現を用いたのは、相手を見くびってのことだったとも解釈できる。

第二に、座頭市がいない場では親分は「めくら」という言葉で座頭市の身体的特性を第三者に説明している。

第三に、居候の身なのに座頭市が自分の依頼に応じないのを知ると、「どめくら」という侮蔑的な表現で座頭市を罵倒するのである。

別の人物について見てみよう。

ため池に釣りに出かけた座頭市は、そこで江戸から来た剣豪である平手造酒<sup>みき</sup>（天知茂）と出会う。肩を並べて釣りをしながら平手造酒が「貴公、目が悪いのか」と聞くと、座頭市は「はい、めくらでございます」と答える。その後座頭市が相手に浮きが引いていますよと注意したので、平手造酒は「貴公、目の見えぬはずなのにどうして浮きの動きを見て取ったのだ」と驚く。

ここでも、平手造酒は「目が悪い」「目の見えぬ」という言い回しを使い、「めくら」を避けているが、座頭市本人は自分を「めくらでございます」と言っている。

しかし少し後の場面で、飯岡の親分と対立関係にある笹川の親分が差し向けた者たちを座頭市が叩き斬ったあと、笹川の親分に「あれは何者です？」と訊かれて平手造酒は「見かけたとおりのめくらだ」と答えている。当人のいる前では「めくら」は使わないが、当人がいない場合は「めくら」と言っている。その点では飯岡の親分と同じである。

平手造酒は作品の最後では座頭市と斬り合いを演じるのだが、悪役ではなく、あくまで礼節を心得た剣豪で、浮き世の義理からやむを得ず座頭市と対立する側に身を置くという設定になっている。したがって平手造酒が絡む場面に

ついて見るなら、座頭市本人のいる前では「めくら」は避けるべき言葉だが、本人がいないところではその身体的特性を説明する価値中立的な言葉と捉えられていると言えるだろう。

別の場面に行こう。

座頭市が世話になっている飯岡の親分と、平手造酒が居候している笹川の親分の間に戦いが起こるかもしれないという状況になる。飯岡の親分は子分たちを前に相手の勢力が弱小であることを揶揄して「めくら蛇に怖じずとはこのことだ」と言うが、子分は「親分、『めくら』は禁句ですぜ」と言って座頭市が同じ屋根の下に逗留していることを示唆する。親分は笑いながらも、いざ笹川一家と抗争になったら座頭市を利用するつもりであることを告げる。親分は以前座頭市の居合い斬りを実際に見ているので彼を信頼しているのだが、子分たちは見ていないので、一人が「たかがめくらじゃないですか」と疑問を呈する。

しかし実はその場にひそんでいた座頭市はこの時声を上げる。「めくらだとか、かたわだとか、そんなこと言ったって別に文句を言いやしねえよ。けどね、たかがめくらだとか、めくらのくせにとか、めくらをあなどった言い方されると文句があるんだよ」と言って、この一家に来て初めて居合い斬りの腕前を披露して子分たちの度肝を抜く。

この場面の『『めくら』は禁句』という子分の発言から、「めくら」という表現が盲目である座頭市に対して失礼な表現と意識されていることが暗示されている。しかし、その場に姿を表した座頭市は、「めくら」だけならいいが、「たかがめくら」「めくらのくせに」という言い方をされると文句を言いたくなる、と述べている。つまり、「めくら」だけでは侮蔑語ではないが、「たかが」「のくせに」という言葉と一緒にになると侮蔑語になる、と座頭市は示唆していることになる。

以上をまとめてみると、『座頭市物語』で使われている「めくら」という表現については次のように言えるだろう。

- ① 座頭市本人は自分について「めくら」と言っている。

- ② 座頭市は他者が自分について「めくら」と言っても気にしていない。しかし「めくらのくせに」「たかがめくら」というような言い回しになると侮蔑的と捉える。
- ③ 座頭市を尊重する他者は、座頭市本人の前で「めくら」と言うのを避けている。
- ④ 座頭市を尊重する他者でも、座頭市本人のいないところでは座頭市の身体的特性を説明するのに「めくら」と言っている。
- ⑤ 座頭市を尊重しない他者は、座頭市本人の前で「めくら」と言っている。しかし同時に本人の前で使うのは失礼という意識もある。
- ⑥ 「どめくら」は明らかな侮蔑語で、座頭市を非難する場合に使われる。

すなわち、「めくら」には価値中立的な表現としての側面と、本人のいる前で使うのは失礼という意識を喚起する表現としての二面性があるということになるのではないか。

### 3.『座頭市 千両首』の場合

もう一作見てみよう。1964年制作のシリーズ第6作『座頭市 千両首』である。

冒頭、祭の最中の村を通りかかった座頭市は、村人に呼び止められ、酒をふるまわれる。村人は「お前さん、おめくらさんかい」と呼びかけ、仲間にも「おめくらさんだよ」と紹介する。

祭は、強欲な代官（植村謙二郎）への上納金千両をようやく用意でき、届けるばかりになったことを祝してのものだった。ところが届ける途中の上納金は、襲ってきた武士たちに奪われてしまう。千両を入れた荷は馬から転げ落ち、山の裾野をさらに転げ落ち、下を歩いていた座頭市のところで止まる。そこに腰を下ろしていた座頭市は武士たちに襲われるが、逆に彼らをやっつける。実はここで上納金をせしめようとした武士には2グループあったのだが、その事実は後で判明する。

村では千両が奪われたという知らせが入って大騒ぎ。座頭市もそこにやってくるが、千両を奪ったのは赤城の山にこもっている国定忠治の子分ではとする村人がおり、さらにその場にいた娘・お千代（坪内ミキ子）が、「その千両箱のそばには旅のめくらもいたよ。あたいはそのめくらが千両箱の上に腰掛けているのをはっきり見たんだ」と告げたので、村人たちは座頭市が犯人だと誤解して襲いかかる。

座頭市は「あんときのあれは千両箱だったんですか。あっしはごらんのとおりめくらでございますから」と言い訳するが、村人は「そのめくらを売り物にしているのがくせえんだ」「それにおめえはめくらのくせにやくざだっていうじゃねえか」「この野郎、めくらのくせしやがって」と叫びながら座頭市をぶちのめす。市は国定忠治がそんなことをするわけがない、今から会いに行行って確かめてくると言い、どうにか村を出る。（座頭市と国定忠治が知り合いであることは、シリーズ第4作『座頭市 凶状旅』で触れられている。）

座頭市が裏街道を通して赤城の山に向かう途中、お吟という女（長谷川待子）がつけてくるが、市は気づいて待ち伏せして女に話しかける。二人は同じ旅籠に宿泊し、浴場でも顔を合わせる。女は「お前さん、本当に目が見えないんだらうね?」と念を押し、浴場を出るとすぐ「変なめくらだよ」とつぶやく。

直後、女はお千代に気づき、呼び寄せて、「あんた、ずっとあのめくらをつけてきたようだけど」と話しかける。

場面は変わって赤城の山。国定忠治（島田正吾）が孤立している様子が描かれる。

再び場面が変わる。お吟がやくざの親分に座頭市のことを報告している。

場面は再度赤城の山。国定忠治は座頭市に対して百姓の千両箱を奪った覚えはないと断言するが、やがて部下二人が独断で千両をとろうとしたと知って二人に縁切りを宣告し、座頭市に俺を斬ってくれと刀を渡す。市は、「世が世なら言葉もかけてもらえねえめこんなめくら」と言って忠治に受けた恩を強調し、下山して逃げるよう勧める。多数の役人が忠治を捕えようと赤城の山を襲うが、忠治は座頭市の援護で下山を果たし、途中で部下を失いながらも何とか逃げ延びる。



その後座頭市はやくざの仕切る賭場で荒稼ぎしてから、その凄腕用心棒（城健三朗）とさらに居合拔きの賭け勝負をして大金をせしめる。

やくざに雇われた別の用心棒二人から千両の行方について情報を聞き出した座頭市は二人にカネを渡すが、二人はカネを拾った上で座頭市を背後から襲うも返り討ち。ここで市は「カネとなりゃ目がねえんだから、目あきはやだね」と皮肉を言う。

その後座頭市は代官の屋敷に出かけ凄腕用心棒と再会するが、用心棒はミミズと座頭市を同列におくような発言をする。しかし市に対しては「座頭」「市」と呼びかけており、「めくら」とは言っていない。

村に出かけて千両について説明しようとする座頭市に村人が押し寄せてくる。この間、代官に直訴に及んだ村人、そして捕えられた村人の許しを請おうとした庄屋も捕縛されて村人は殺気立っている。座頭市は、自分も忠治も千両を奪ってはいないと説明しするが村人から「どめくら！」とののしられ、それまでひたすら平身低頭だった態度を急変させて恐ろしい形相を見せ、村人たちを後じさりさせる。

村から離れた座頭市に、お千代が近寄ってくる。お千代はかつて兄を座頭市に斬り殺されたのだった。彼はそのことをわびて、「目が見えねえもんだから」不意に斬り付けられると相手を殺すような防御しかできないのだ、と説明する。お千代はそんな座頭市に感じ入り、殺してもいいと言われても優しく対応する。

座頭市は直訴して捕えられ処刑されかかっていた村人と庄屋とを救出する。報告を受けた代官は「襲ったのは百姓か」と問い、「いえ」という答に対してさらに「めくらか」と問う。実は上納金の千両を部下に奪わせたのは代官自身だった。

やがて代官を殺して千両を取り返した座頭市は、お千代に千両を預け、これを村人に返し千両を奪ったのは誰かを話してくれるよう頼み、去ろうとする。娘は、「皆のよろこぶ顔を見てから行ったら」と言うが、「ははは、よろこぶ顔を見ろって、それはめくらのあっしには無理だ」と答える。

最後に座頭市は凄腕用心棒と対決して倒し、幕切れとなる。



ここでは、村人たちの座頭市に対する言葉遣いから、彼らの感情が見て取れる。

最初、祭の最中に通りかかった座頭市を招き入れ、酒をふるまう村人は丁寧に「おめくらさん」と呼びかけている。ところがその後、上納金千両が奪われてしまい、座頭市にその嫌疑がかかると、「めくらのくせに」と軽蔑した言い方に転じている。さらに時間が経過して相変わらず千両の行方が分からず、国定忠治と会見した座頭市が犯人は忠治でも自分でもないと釈明すると、村人の苛立ちは最高潮に達し、「どめくら」と叫んでしまう。しかしこの言葉を聞いた座頭市は、それまでは善良な村人たちに同情してひたすら丁寧に対応していたものが、不意に殺気だった様子を見せる。「どめくら」という表現に不快感を覚えたのだ。

この作品では村人はあくまで被害者であり、悪役は強欲な代官や彼から十手を預けられたやくざの親分である。しかし善良な村人も千両強奪の犯人が不明のまま座頭市に対する嫌疑や苛立ちは高まるにつれて言葉遣いも侮蔑の度合いを高めていき、ついに「どめくら」という罵倒語に至るのである。

悪役である悪徳代官ややくざの親分やその手下が「めくら」「どめくら」を使用していること、座頭市自身も自分を「めくら」と言っていることは、このシリーズの他作と共通する。他方、悪役でない国定忠治は座頭市に対して「めくら」とは言っていない。

また、この作品では女も「めくら」と言っているが、お千代は座頭市に兄を殺された恨みからそのような言葉遣いをしているのだし、お吟は悪党の一味という位置づけだからだろう。そのお吟も座頭市本人の前では「めくら」とは言っていない。

このシリーズでは総じて女が「めくら」と言うシーンは少ない。時代劇では女の言葉遣いは男より丁寧ということもあろうし、『座頭市』では女が敵役になることが少ないからでもあろう。独立した項を立てるほどではないので、ここで簡単にこの点に触れておく。『座頭市』で女が「めくら」と発言するのは、大

別して以下のような場合である。

- ① その女に座頭市に対する恨みがある場合。『座頭市 千両首』のお千代がそれに当たる。お千代は座頭市の前で「めくら」と言っている。
- ② 女が悪人の一味である場合。『座頭市 千両首』のお吟、第5作『座頭市 喧嘩旅』のお久（ただし最後は座頭市側につく）、第11作『座頭市 逆手斬り』の悪徳射的屋の女がそれに当たる。座頭市の前で「めくら」と言っているのは第11作だけである。
- ③ 第3作『新・座頭市物語』では、老女が「めくらのくせして一日中歩き回って」と言うシーンがある。老女はむかし座頭市の母親代わりだったという設定で、年長の家族として遠慮ない言葉遣いができるということであろう。

#### 4. 『座頭市と用心棒』の場合

もう一作を取り上げる。1970年に制作されたシリーズ第20作の『座頭市と用心棒』である。この作品がシリーズの他作と趣きを異にするのは、客演に三船敏郎を迎えているからだ。黒澤明の映画に重用され、また国際的にも名を知られた三船は日本の映画俳優として特別な存在であり、座頭市を演じる勝新太郎より格上と見られていた。加えて、ここで三船が演じる用心棒の性格は、明らかに黒澤明の『用心棒』（1961年）を意識して作られている。そのためもあって、シリーズの他作では座頭市と対立する剣豪は最後にはことごとく倒されているが<sup>5)</sup>、この『座頭市と用心棒』では以上のような事情からして従来のような筋書きにするわけにはいかず、作品の最後近くで座頭市と用心棒は対決するものの、結局勝負がつかないままに終わる（後述）。

以下、筋書きをたどってみよう。

座頭市は或る町に宿泊するが、そこで「にわかめくら」のあんまと知り合う。だが二人は何者かに襲われ、「にわかめくら」は斬られる。町には何か秘密がありそうだった。

やがて座頭市は用心棒（三船敏郎）と出会うのだが、初対面のシーンで用心棒は「めくら、やい、どめくら」と呼びかける。二人はいったん酒場に行くが、その女将・梅乃（若尾文子）は座頭市には「あんまさん」「市さん」と呼びかけている。

その後、座頭市は裕福な商人・烏帽子屋（滝沢修）に呼ばれてあんまの仕事をするが、用心棒が火を焚いて煙を大量に出し、火事と見せかけて商人をゆする。座頭市も逃げようとするが、目が見えないため右往左往していたところを、用心棒がわざと嘘の方向が逃げ道だと教えて、座頭市が四苦八苦するのを見てからかう。座頭市はなんとか屋敷から抜け出した後、「かたわをいたぶってさぞ面白かったでございましょう」と憤然とする。「くやしかったら俺をかたわに、いざりにでもしてみろ」と答える用心棒。

その後、座頭市が烏帽子屋に用心棒として雇われたと思い込んでいる用心棒は、俺を殺したらいくらになると問うが、座頭市はまともに答えない。すると用心棒は立腹して「めくら、やい、どめくら」という言葉を投げつける。

「どめくら？ はは、ええ、一度はようござんす」と座頭市。

「なんだと、どめくら」

「二度もようござんすよ。三度となりゃね」

このあと用心棒は挑発して「どめくら、どめくら、どめくら」と三回連続で叫ぶ。

しかし直後に刺客数人が襲ってきて、座頭市は得意の居合い斬りで相手をすべて倒す。それを見ていた用心棒は「なるほど、〔懸賞金〕二百両の価値はある。やい、どめくら、こっちを向け」と勝負を挑む。

ところが風でほこりが舞い上がり、用心棒の目に入ってしまう。舌打ちする用心棒に座頭市は「どうかなさいましたか？」

「目、目が見えねえ」

「わたくしは見えなくても結構でございますよ」

「そういたぶるな。めくらがにわかめくらを斬っても後味が悪かろう」

座頭市は笑って「悪かろうはずはございません」

用心棒は舌打ちして「そう言うな」となだめるが、座頭市は「やい、どめく

ら」と相手を罵倒する。

このほか、用心棒は何度か座頭市を「ばけもの」と呼び、座頭市は「けだもの」とやり返すシーンもある。

最後で座頭市と用心棒は斬り合いをするが、死んだと思われていた梅乃が生きていると判明して、途中でやめてしまう。このシーンでも用心棒は「いくぞ、どめくら」と呼びかけている。

用心棒は、実は公儀隠密ながら身分を隠し用心棒として雇われて情報収集をしている武士だった。ただし、日ごろは酒を飲んだりしてのらくらしており、自分の正体を悟らせない。しかし他方で梅乃に愛情を抱いており、彼女と暮らすために隠密の仕事を捨てようかとも考えている。作品の最後では、町を牛耳る欲深い烏帽子屋の死のあと、座頭市は一人で、用心棒と梅乃は連れだってそれぞれ町を後にする。

この作品では、先にも述べたように三船演じる用心棒が主役の座頭市とほぼ同じ重みをもって用いられており、登場回数も多い。また、その性格は黒澤の『用心棒』の主役を意識して作られており、このシリーズの他作に見られるようなストイックで武士としての倫理観を備えた剣豪でも、純然たる悪役でもなく、日中から酒を飲んだりごろごろしており、用心棒としての職務を果たすよう求められるとそのたびに大金を要求したり、座頭市をからかったりと、一筋縄ではいかない性格の主として描かれている。

そうした性格の用心棒と座頭市の「差別語」によるやりとりをどのように見るべきだろうか。

シリーズ他作では、「どめくら」は悪役が座頭市に投げつける悪態であり、或いは前項で見たように、悪役ならざる村人が誤解から座頭市に投げつける罵倒語であった。

この作品でも、「どめくら」と三度言ったら許さないと座頭市が警告しているのは、他作と同じように見えるし、その後で砂ぼこりが目に入って闘えなくなった用心棒に対して座頭市が「どめくら」とやり返すのは、身障者に対して差別語を使った人間が砂ぼこりにより身障者同然になり自身が差別語を浴びせ

られるという、一種バランスの取れた因果応報的な筋書きと見ることもできる。

しかし、そうした道徳的な観点からだけこの場面を分析しては、本作品の大事な部分を見落とすことになる。つまり三船演じる用心棒の性格である。すでに述べてきたように、この作品の用心棒はストイックな剣豪でも、純然たる悪役でもない。一方で酒を飲み、カネをせびり、しかし女には深い愛情を抱き、だが表向きは彼女を乱暴に扱い、座頭市のような身障者を相手にするや子供のようにからかうのである。そう、ここでの用心棒は子供が遊戯に興じるときのように天真爛漫で、座頭市に「差別語」を投げつけるのも、火事の場面でわざと嘘の方向を教え苦境に陥る座頭市を見て笑い転げるのも、遊びに夢中になっている子供のような印象を与える。

別の言い方をしよう。用心棒は座頭市を対等の人間として扱っているのだ。三船演じる用心棒は雇い主に対しても一切の遠慮をしないし、惚れた女にも傍若無人な態度をとる。それが彼の対人作法の基本なのであり、それは身体的ハンディを持つ座頭市を相手にしても変化がないのである。相手を罵倒したりからかったりすることは、悪意の対象にのみなされることではない。それは親愛の情の表現であり、大人同士の冗談を含んだコミュニケーション手段の一種にほかならない。親しい友人であるからこそお互いに罵倒語を用いたり、からかい合ったりすることができるのである<sup>6)</sup>。

伊藤亜紗は以下のような実話を紹介している。小学生のときに弱視になり手術により半年ほど学校を離れていた生徒は、学校に復帰したときに以前は最も親しかった友人と元の関係に戻ることができなかった。友人は弱視である彼には丁寧な態度で接しなくてはならないと思っており、それが逆に友人関係を壊してしまったのである。伊藤はここでこう書いている。「[相手を]「大事にする」のは、友達と友達の間関係ではありません。からかったり、けしかけたり、ときには突き飛ばしたり、小学生の男子同士なら自然にやりあうようなことが、善意が壁になって成立しなくなってしまった<sup>7)</sup>。」

こうした視点を含めて考えるなら、この作品で用心棒が座頭市に投げかける「どめくら」という表現や、座頭市の身体的ハンディを利用して彼ををからかう

態度は、杓子定規な道德観には収まらない人間同士の豊穡なやりとりと見る事ができよう。もとよりそうした豊穡さは、三船敏郎という存在感抜群で清濁併せのむようなスケールの大きさを持つ俳優によってこそ初めて十全に表現可能になるとも言えるだろう。

単に「めくら」「どめくら」を使ったから差別、というような杓子定規な見方をしている限り、作品のそうした側面は見えてこないし、そもそも人間関係の複雑さや、言葉というものの持つ多面的な性質にもそれこそ盲目であるしかあるまい。

## 5. 「めくら」は「差別語」なのか

今日、「めくら」は差別的な表現と受けとられることが多い。伊藤亜紗は「障害者」が近年「害」の字を避けるために「障碍者」「障がい者」と表記されがちであることに異議を唱えているが<sup>8)</sup>、その伊藤自身が視覚障害者を扱った本で「めくら」を一度も使っていないのは奇妙なこととも見られよう。

上述のように、日本で用語規制がやかましくなったのは1973年からである。そうした事態の進行を記録した書物『「差別用語」』には、1975年5月24日に行われた「第1回用語と差別を考えるシンポジウム」が収録されている。その第2分科会「身体障害者と差別用語」では、「めくら」という言葉に対する視覚障害者の見解が披露されているが、発言者ごとに見解はまちまちであり、使うべきではないという意見もあれば、この言葉が差別的になるかどうかは文脈次第であり一様に否定するべきではないという意見もある<sup>9)</sup>。

今日でも、13歳で完全に失明した文化人類学者・広瀬浩二郎は、「座頭市流フィールドワーカーが行く！」という副題を持つ著書『触る門には福来たる』のあとがきで、「めくら蛇に怖じず」は差別語なのかと問いかけて、かつて盲目の琵琶法師は晴眼者にできない仕事を行っていたのに、「めくら」が「目の不自由な人」という語に置き換えられることで盲人特有の力が見失われた、つまり「めくら」がいなくなった現代は「目が不自由な人」が「蛇に怖じる」時代なのだ、と皮肉を交えて語っている<sup>10)</sup>。

しかし「めくら」などの「差別語」は法律からも駆逐されている。きっかけは、1980年10月の長野県信濃町議会で自らも障害者である議員の質問が契機となり町当局が給与条例から「不具廃疾者」の言葉を削除し、さらに町議会が県や国に対して同様の措置をとるよう要望したことであった。81年に国際障害者年を控えていたこともあり、政府・総理府・厚生省はただちに法律からこの種の用語を削除する作業に入り、厚生省関係の法律からは「不具廃疾」と並んで「つんぼ」「おし」「めくら」が消えた。そして類似の作業はその後も続行されている<sup>11)</sup>。差別語狩りは、部落解放同盟などの圧力団体だけでなく、中央省庁や地方公共団体によっても進められたのである。

だが差別語狩りに主導的な役割を果たしたとも見られる部落解放同盟にしても、必ずしも教条主義的に差別語を規定していたわけではない。部落解放同盟中央本部が1975年9月に出した「差別語問題についてのわれわれの見解」には以下のような箇所がある。

「病人や体の不自由な人は、資本にとって、労働力として搾取の対象とならないところから、「余計者」「厄介者」として、阻害されているところに、差別の根本がある。／したがって、ことばのいいかえでは問題は解決しない。「きちがい」を「精神障害者」(…)とかよびかえても、「余計者」「厄介者」待遇が変わらねば、いささかも事態は変わらないことは、いうまでもない。とくに「めくら」を「盲人」におきかえるのは、全くの同義語を大和ことばから、漢語におきかえたにすぎない<sup>12)</sup>。」

ここには重要な指摘が含まれている。差別語とされる言葉は多くが大和言葉であり、漢語やそれ以外の外来語は差別語とされにくいという事実である。なぜ「めくら」はだめで「盲人」ならいいのか。「盲」にしてもその字の成り立ちからして「目が亡くなる」という意味で、「めくら」と変わらないのに。大和言葉は直接日本人の言語感覚に響くがゆえに差別語とされやすく、漢語は大和言葉よりどこか間接的に感じられるがゆえに差別語とされにくい。今どきの報道で犯罪(容疑)者には「おとこ」「おんな」という大和言葉が使われ、そうでない場合は「男性」「女性」と漢語風の表現が用いられるのも同じ理由からである。しかしこういう言語感覚を一度根源的に疑ってみることも必要ではない



か。

先に『座頭市と用心棒』について述べたように、悪口や侮蔑的な表現と親愛の情とは矛盾しない。むしろその表現が差別に傾く場合があることは十分考慮しなくてはならないが、文脈を無視して一律に差別語を決定することは言語表現の規制というにとどまらず、複雑で微妙な人間関係を単純な原則で規定することにつながるという認識をまず持つ必要があるのではないか。

1973年頃から強化された放送局の用語規制には、「めくら」など障害に関わる語だけでなく、例えば「床屋」は「理髪師」に、「パーマ屋」は「美容師」といった職業表現に関するものも多数含まれている<sup>13)</sup>。ここに見られるのは、日常的・俗語的な表現は正式な職業表現に直さなければという意識である。しかし親が子供に「髪が伸びたから床屋に行ってきたさい」と言う場合に「床屋」に差別意識が含まれていると思う人はいないだろう。原義がどうであれ、「床屋」は少なくとも戦後の日本では理髪業者を指す日常的な表現に過ぎなかった。杓子定規な用語規制の滑稽さをここに見て取るべきなのである。

1985年に当時の西ドイツ大統領ヴァイツゼッカーが演説で述べた言葉「過去に目を閉ざす者は現在にも盲目になります」は日本でも有名になった<sup>14)</sup>。しかしここで使われている「盲目」という表現に、少なくとも日本では異議が唱えられたという事実を知っている人は多くなかろう。これについて西尾秀和は、「盲目」がいつも差別的表現になるとは限らないとしながらも（ただし「めくら」は、「めくら判」のように他に適切な言い換えがない合成語を除いて使うべきでないとしている）、この文章では否定的な意味で使われているから避けるべきだとして、「過去に目を閉ざす者は現在にも目を閉ざすことになる」というような訳文が望ましいとしている<sup>15)</sup>。だがヴァイツゼッカーの原文はといえば、“Wer aber vor der Vergangenheit die Augen verschließt, wird blind für die Gegenwart.”であり、blind（盲目）という単語を使っているのである。このblindという語にドイツ国内で異議が唱えられたかどうかは分からない。しかし少なくともその演説は印刷されて出回っている。それと比べるなら、日本最大の出版社である講談社の法務部長を勤めた西尾のこうした見解は、日本の出版界の過剰反応ぶりを示す証拠と言えるのではないか。

以上のような硬直した姿勢は、出版界だけでなく研究者にも見られる。言語学者・遠藤織枝は「めくら」「盲人」「めくら判」などの用語を使っていいかどうかを視覚障害者を対象にアンケート調査している。しかし遠藤自身は「めくら」を差別用語と最初から決めてかかっており、別の見方もあるのではないかといった思考には至らない<sup>16)</sup>。また社会学者・好井裕明は若かった頃に或るシンポジウムに出て、終了後も参加者の会話が Continuing 中で或る学者が「きちがい」という言葉を使ったので、「その言葉は差別的だ」と批判したら反論されたという経験を語っている。しかしここで「きちがい」がどういう文脈で使われたか、なぜ差別的なのかということに好井はまったく言及していない。当時自分は若かったが差別には敏感だったのだという自慢話として出てくるのである。彼が文脈を考えずに固定的に「差別語」を決める人であることはここから分かる<sup>17)</sup>。

ノンフィクションライターの上原善広は、「どめくら」は差別用語だが、「めくら」は時代劇や古典落語によく出てくる言葉で、断りを入れた上でそのまま放送していいのではないかと述べ、「めくら」という言葉に傷つく人が存在するのは分かるが、歴史的にも豊富な語彙を生んだ言葉である。とくに古典や時代劇では言い換えをしては成り立たなくなるため、少なくとも歴史的、慣習的な語句に関しては、そのまま使用してよいと思う」としている<sup>18)</sup>。

このように、現在でも「めくら」などの「差別語」をどう捉えるかは人によりかなり違いがあるのである<sup>19)</sup>。

## 6. テレビで放送されない『座頭市』はなぜ人気があるのか

上述のように、今日、勝新太郎主演の映画版『座頭市』はテレビで放送されない。1973年頃から日本のマスコミで用語規制が厳しくなったことはすでに述べたとおりだが、1974年に関西テレビで『座頭市』が放送されたとき神戸盲人協会から抗議があり、それがきっかけとなっただけではない。なおこの点について高木正幸は、1974年4月、「関西テレビの『座頭市』シリーズの中で浪人が座頭市を「どめくら」とのしる場面があった」ため同協会から抗議があったと記し

ている<sup>20)</sup>。この書き方だとテレビドラマ版『座頭市』と受けとられかねないが、テレビドラマ版『座頭市』はフジテレビ制作で1974年10月4日放送開始であり、そこでは「めくら」という語は一切使われておらず、「あんま」「目が見えない」といった言い方で通している。そもそも民放連では1974年9月4日に「放送上差し控えたい用語について」というリストを作っており、その最初に「めくら」が挙げられているのである<sup>21)</sup>。したがって1974年4月に関西テレビで放送された『座頭市』とは映画版でしかあり得ない。

これについて、自らも肢体に不自由を抱える本間康二は、「ぼくらは言葉尻を問題にしない」という一文を1975年の雑誌『放送レポート』に寄せている<sup>22)</sup>。

「去年のいつだったか（…）「座頭市破れ唐人剣」という劇映画の放映がありました。僕は座頭市が大好きでテレビで何本も見ています。上田吉二郎あたりが出て「こ、このドメクラ」と叫ぶ。市さん「一度はいいでしょう。」すると又も「ドメクラ!」「親分さん、いいんですか？ 二度までは許しましょう。しかし三度目には……」と仕込みのこいくちを切りながら言う、「うるせえ。みんなこのドメクラをたたっ切れ!」と号令、ヤクザがかかるのをズバツバツバツバ…障害者を馬鹿にしやがって様ァ見ろと、こちらもいい気になって見るのです。ところがこの日座頭市の途中、相手の悪役の叫ぶ声が消えたのです。おや?と思うとすぐ次の市さんの声は入ってる。（…）つまりこの悪役は「ドメクラ!」を叫んだのですが、その部分がカットされているのです。」

そして本間は、まもなくテレビドラマとして始まった「座頭市物語」には「めくら」という言葉は一切使われていなかったことを指摘し、「「不具・廃疾」の用語を使って六法を作った法律家より、それを破る犯罪者の方が思いやりがあるという事でしょうか」と皮肉り、さらに次のように述べている。

「ドラマの中でそのような言葉が出たとして、どこいらの団体が抗議するだけでも言うのでしょうか。時代相応のそしりを人々から受け、その中でも負けずに生きる姿があってこそ、本当の障害者の哀しみや喜びを知る事ができるのです。それを認めず、ただ言葉尻をとらえて事あるごとに非難するとしたら、それこそ障害者のヒガミであり偏狭なのです。そんな抗議に耳を貸してドラマの正当性を歪曲し、作者の芸術性を無視するなら、テレビ局はなぜに聴力障害者

の切実な要求である手話・字幕入りの放送を実行しないのでしょうか。」

映画版『座頭市』についてテレビ局は当初はこうに「差別語」の音声消して抗議に対応していたが、やがて作品そのものが登場しなくなったということだろう。

雑誌『放送レポート』は1980年代以降も放送における用語規制の問題を一貫して取り上げているが、1983年11月号では「めくら」も取り上げられている。同年1月KBS京都が旧作のテレビドラマ『ご存じ!金さん捕物帳』を事前チェックしたところ「めくら」が多数含まれていたために放送を中止したという例を始め、同様の例がいくつも挙げられている。また、びわ湖放送で谷崎潤一郎原作『春琴抄』の映画版(1961年)をチェックしたところやはり「めくら」が多数出てきたが、そこをカットすると放送に耐えなくなるため、そこだけ音量を小さくして放送したという、冗談のような実例も挙げられている<sup>23)</sup>。

現在のテレビ放送では「めくら」などの「差別語」を含む映画作品がまったく放送されないわけではない。「本作品には一部、現在では不適切な表現がありますが、作品の歴史的価値を考慮してそのまま収録してあります」などの断りをあらかじめ入れることで、使用回数に限られている場合はそのまま放送されている。ただし「差別語」が出てくるときはその音声が消える場合は今もあるし、映画版『座頭市』は、おそらく「めくら」の使用回数が多いためであろう、いまだにテレビでは放送されない。

こうした状況は、『座頭市』が高い人気を誇る映画作品であることを考えるとき、きわめて由々しい問題と言えるのではないか。

キューバのハバナ大学教授として映画史を講じているマリオ・ピエドラは、「キューバ人のヒーロー「座頭市」」という一文の中でこの作品の魅力を論じている<sup>24)</sup>。それによると、キューバ人はもともと映画好きであり、同国では長らくハリウッド映画が幅を利かせていたが、1959年に社会主義革命が行われ翌1960年から米国による経済封鎖が始まるとハリウッド映画は入ってこなくなった。その代わりにソ連映画が上映されたが、社会主義リアリズムを基本とする作品は娯楽性に乏しい上にキューバ人には遠い国の出来事で馴染みがないため、必ずしも歓迎されなかった。1960年代後半になってフランス、スペイン、

イタリアと並んで日本の映画、特にサムライ映画が輸入されるに至り、三船敏郎や勝新太郎が多大な人気を博した。サムライ映画は、そして身体にハンディを持つヒーローが悪を叩き斬る「座頭市」シリーズは、キューバ人にとっては「パケーテ」であるが故に愛好されたのだ、とピエドラは分析する。「パケーテ」とは「現実味のない、信じがたい出来事」のことであり、冗談として受けとられるが、「共感を呼ぶ誇張」でもあって、受け手も作り話に加担しているのである。そしてキューバ人が座頭市を好むことにもこの「パケーテ」愛好が与っているのだという。

しかしピアドラの分析は、キューバ人だけにとどまらず、『座頭市』を愛好する日本の映画ファンにも当てはまるのではないだろうか。「共感を呼ぶ誇張」こそ、映画に限らず、ドラマや小説などのフィクション全般に欠かせない要素なのであるから。

『座頭市』に人気があることは、勝新太郎が死去した1997年以降、別の俳優を主演にして三度映画化されているという事実からも分かる。ビートたけし主演の『座頭市』（2003年、北野武監督）、綾瀬はるか主演の『ICHI』（2008年、曾利文彦監督）、香取慎吾主演の『座頭市 THE LAST』（2010年、阪本順治監督）である。この中では、北野武が脚本を書き主役と監督をも兼ねた『座頭市』だけが、「めくら」「どめくら」を使っている。他の二作には「めくら」は出てこない。（阪本順治監督作ではやくざが一度だけ座頭市を「ミミズ」呼ばわりしている。「目なし」の含意だろう。『座頭市 千両首』における凄腕用心棒の発言と共通する。）北野武の見識を示すものと言えるのかもしれない。

（本論文の執筆にあたっては、新潟大学人文学部2013年度研究推進費から援助を受けました。）

## 注

- 1) 『『差別用語』』, 286頁。
- 2) 前掲書, 8頁以下, および286頁以下。
- 3) 座頭とは, 「中世・近世, 僧形の盲人で, 琵琶・琴などを弾いたり, また按摩・鍼などを職業にとした者の総称」である(『大辞林 第二版』, 三省堂, 1995年)。
- 4) 『『差別用語』』, 9頁以下。
- 5) 1971年のシリーズ第22作『新座頭市 破れ! 唐人剣』では, ゲストに香港映画でカンフー俳優として著名だったジミー・ウォングを迎えているため, 日本ヴァージョンでは最後に座頭市が異国の剣客である王剛(ジミー・ウォング)を倒すのに対して, 香港ヴァージョンだと逆になっているという説があるが, 真偽は不明である。英語版 Wikipedia の「Zatoichi and the One-Armed Swordsman」による(2016年1月5日閲覧)。
- 6) クリント・イーストウッド監督・主演映画『グラン・トリノ』(2008年)では, 主役(イーストウッド)のポーランド系米国人が行きつけの理髪店でイタリア系米国人の店主と互いの出自を悪態でけなし合うシーンがある。これは明らかに親密さの表現である。実際, この映画は1950年代の価値観を支えに生きる老いた主役が, 近所に住む東南アジア系の少年に米国人としての生き方を教授するという筋書きだが, 理髪店では少年に対して初対面の場合は店主に悪態をつかないようにと戒めている。最後に主人公の遺言状が公開されるが, そこでも出身民族をけなす悪態が使われている。多民族国家の米国において出身民族をけなす表現は, 差別的であると同時に親愛の情の表現にもなっているという二重性をうかがわせて興味深い。
- 7) 伊藤亜紗, 38頁。
- 8) 前掲書, 204頁および210頁以下。
- 9) 『『差別用語』』, 189頁以下。
- 10) 広瀬浩二郎, 183頁。
- 11) 高木正幸, 120頁以下。
- 12) 前掲書, 302頁以下。
- 13) 『『差別用語』』, 287頁。
- 14) 日本では永井清彦の訳により岩波書店から出たが, やはり盲目という訳語を用いている。『荒れ野の40年』, 16頁。

- 15) 西尾秀和, 100頁。
- 16) 遠藤織枝, 42頁。「視覚障害者」という表現について, 視覚障害者自身には拒否感が少ないと述べて, 「たしかに「めくら」「あんまさん」などの持つ差別性や不快感はこの語にはない」としている。
- 17) 好井裕明, 51頁。
- 18) 上原善広, 141頁。
- 19) 日本最大の国語辞典である小学館の『日本国語大辞典第二版』(2001年)によると, 「めくら」という言葉はすでに12世紀初頭の文献に見られる。だが同時にこの辞書は, 「「めくら」という語, および「めくら」に関する語は, 目の不自由な人への蔑視観が強く, 現代では障害者差別の語とされている」と記述している。しかし「蔑視観」は人間が持つもので, 言葉自体が持つわけではなからう。国語辞典制作者にはまともな日本語が書けないということの一例かもしれない。
- 20) 高木正幸, 108頁。
- 21) 『「差別用語」』, 286頁以下。ただしそこでは「あんま」も不適切な表現とされ, 「マッサージ師」などと言い換えるのが適切とされている。ここでも, 大和言葉は不適切, 外来語は適切という奇妙な分け方がなされている。
- 22) 『放送レポート』第18・19合併号, 1975年5月, 32-33頁。
- 23) 前掲誌, 第65号, 1983年11月, 24頁。
- 24) 寺島佐知子訳, 『すばる』2013年1月号, 172-183頁。

## 参考文献

### 【書籍, 雑誌】

- 用語と差別を考えるシンポジウム実行委員会 (編): 「差別用語」(汐文社, 1975年)  
用語と差別を考えるシンポジウム実行委員会 (編): 続・「差別用語」(汐文社, 1978年)  
山中央: 新・「差別用語」(汐文社, 1992年)  
江上茂: 差別用語を見直す マスコミ界・差別用語最前線(花伝社, 2007年)  
生瀬克己: 障害者と差別表現(明石書店, 1994年)  
ジョナサン・ローチ(飯坂良明訳): 表現の自由を脅かすもの(角川書店, 1996年)  
高木正幸: 差別用語の基礎知識 96(土曜美術出版販売, 1996年)



- 小浜逸郎：「弱者」とはだれか（PHP 新書，1999年）  
西尾秀和：差別表現の検証（講談社，2001年）  
週刊文春（編）：徹底追及「言葉狩り」と差別（文藝春秋，1994年）  
遠藤織枝：視覚障害者と差別語（明石書店，2003年）  
広瀬浩二郎：触る門には福来たる 座頭市流フィールドワーカーが行く！（岩波書店，2004年）  
好井裕明：差別原論 〈わたし〉のなかの権力とつきあう（平凡社新書，2007年）  
上原善広：私家版 差別語辞典（新潮社，2011年）  
小林健治：差別語不快語（にんげん出版，2011年）  
伊藤亜紗：目の見えない人は世界をどう見ているのか（光文社新書，2015年）  
荒れ野の40年 ヴァイツェッカー大統領演説 岩波ブックレットNO.55（岩波書店，1986年）  
平岡正明：座頭市 勝新太郎全体論（河出書房新社，1998年）  
春日太一：天才 勝新太郎（文春新書，2010年）  
メディア総合研究所（編）：放送レポート〔隔月刊雑誌〕（大月書店，1971年ー）  
すばる 2013年1月号（集英社）

## 【DVD】

### ■勝新太郎主演，映画版『座頭市』

- ボックス座頭市〔全26作中18作〕（角川映画，2009年）  
座頭市 牢破り〔1967年〕（東宝，2010年）  
座頭市と用心棒〔1970年〕（東宝，2003年）  
座頭市 あばれ火祭り〔1970年〕（東宝，2010年）  
新座頭市 破れ！唐人剣〔1971年〕（東宝，2003年）  
座頭市 御用旅〔1972年〕（東宝，2010年）  
新座頭市物語 折れた杖〔1972年〕（東宝，2010年）  
新座頭市物語 笠間の血祭り〔1973年〕（東宝，2010年）  
座頭市〔1989年〕（JVD，2004年）

### ■勝新太郎主演，テレビドラマ版『座頭市』

- 勝新太郎 シリーズ 座頭市物語（ポリドール映像販売／ケンメディア，2007年）  
勝新太郎 シリーズ 新・座頭市 第1シリーズ（ポリドール映像販売／ケンメディア，2007年）

勝新太郎 シリーズ 新・座頭市 第2シリーズ（プレミアムエンターテインメント／ポリドール映像販売，2007年）

勝新太郎 シリーズ 新・座頭市 第3シリーズ（プレミアムエンターテインメント／ポリドール映像販売，2007年）

■勝新太郎以外の主演による映画版『座頭市』

座頭市〔ビートたけし主演，北野武監督，2003年〕（バイダイビジュアル，2003年）

ICHI〔綾瀬はるか主演，曾利文彦監督，2008年〕（GENEON UNIVERSAL，2009年）

座頭市 THE LAST〔香取慎吾主演，阪本順治監督，2010年〕（東宝，2010年）

■『座頭市』以外の映画作品

用心棒〔黒澤明監督，1961年〕（東宝，2009年）

グラン・トリノ〔クリント・イーストウッド監督，2008年〕（Clint Eastwood 35 Films 35 Years，ワーナー・ホーム・ビデオ，2010年）

## 【追記】

本論文「映画作品におけるいわゆる差別語の使用について」において、勝新太郎主演映画『座頭市』はテレビでは放送されないと記したが（Y92、Y107 ページ）、2016 年 3 月 19 日午後 2 時から BS フジでシリーズ第 12 作『座頭市 地獄旅』（1965 年）が放送された。この作品では「どめくら」は使われておらず、「めくら」は使われているが大半が座頭市本人の台詞である。放送にあたってそうした事情が考慮された可能性はあろう。作品開始直後と中途の 2 度にわたり、「本作品には、不適切と思われるセリフがありますが、当時の時代背景を考慮し、そのまま放送いたします。ご了承下さい。」というテロップが画面下方に映し出された。